

# 哲学の道周辺の界隈形成に関する研究\*

## Formation of Neighborhood around the Philosopher's Path \*

出村嘉史\*\*・川崎雅史\*\*\*・田中尚人\*\*\*\*・谷中友美\*\*\*\*\*

By Yoshifumi DEMURA\*\*・Masashi KAWASAKI\*\*\*・Naoto TANAKA\*\*\*\*・Tomomi YANAKA\*\*\*\*\*

### 1. 研究の目的

本論は、京都大文字山の麓の景勝地である「哲学の道」を軸とした領域（浄土寺・鹿ヶ谷）を対象として（図1）、近代以降の景観変容に伴う界隈形成の過程を明らかにする事を目的とする。具体的には、まず近世までに成立していた名所地の構成を把握し（2章）、それから近代における主要な景観変容を起こす事件をまとめて時代区分をし（3章）、以下その区分に基づいて、この地域に起こった空間認識の変化とアクションとそれらの要因を明らかにした。

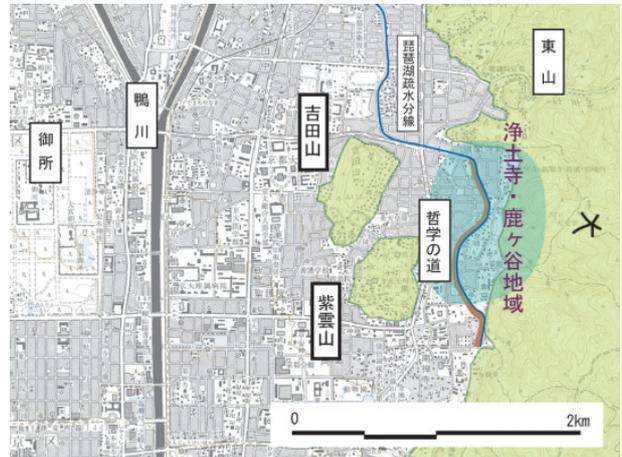


図1 洛東の浄土寺・鹿ヶ谷地域

### 2. 名所の原形 - 地形概観と社寺の配置

図2にみるようにこの地域は浄土寺地域と鹿ヶ谷地域の二つの扇状地で構成されている。このような山辺における社寺の配置は、それらの起源にまつわる思想によるものと考えられるが、全ては山裾の傾斜が大きく変わるところに作られている。

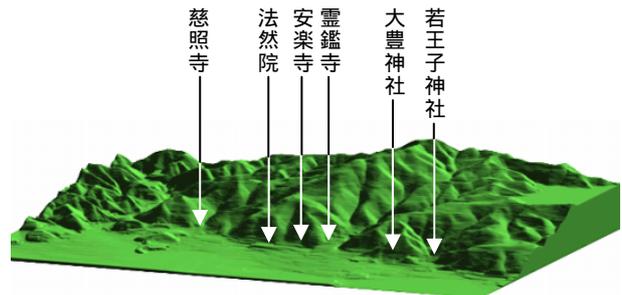


図2 浄土寺・鹿ヶ谷地域の地形

#### (1) 社寺の景観特性

浄土寺・鹿ヶ谷地域の社寺は、それらの起源により分類すれば、水分神社<sup>1)</sup>型（大豊神社、若王子神社）、念仏道場型（法然院・安楽寺）、別荘地型（慈照寺・霊鑑寺）の三つに分けて占地理由を説明できる。しかし、水分神社型では東奥へ進むほど東の明快な稜線に対して西側背後を森が鬱蒼と囲み、念仏道場型では境内が南向きで北東を奥にして山懐への方向を強く持ち、また別荘地型では西側を囲い



図3 慈照寺・霊鑑寺の山へ溶け込む景観

東側の傾斜を利用して庭を造るなどと、それぞれのデザイン要素の集中した場所において、東側の山並みをベースにしており、町への眺望を得るよりは、むしろの懐へ自らを収め、溶け込む志向のデザインがされている（図3）。

#### (2) 社寺・集落・道の構成

以上のように山裾に複数の社寺が並び収まっていた訳であるが、それらは広い山辺の中でも傾斜が大

\*キーワード：水辺空間，山辺の空間構成，界隈形成

\*\*学生員，工修，京都大学大学院工学研究科

(京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-5123

e-mail:n50461@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp)

\*\*\*正会員，工博，京都大学大学院工学研究科

\*\*\*\*正会員，工博，岐阜大学工学部社会基盤工学科

(岐阜市柳戸1-1 TEL:058-293-2447)

\*\*\*\*\*非会員，東名古屋病院付属リハビリテーション学院

大きく変わる一帯に分布している。蒐集した近世の絵図を分析した結果、これらの社寺一帯の手前は田地であり、社寺間にはそれぞれの門前を結ぶ道と農村集落が存在していたことがわかった（図4）。

集落、畑地の間で成立したこれらの道は、地形と社寺の配置を条件に自然発生的に出来上がった曲線であり、これが現在のこの領域を形成する要素の骨格になっている道の原形であるといえる。

この地域全体が、限られた道でつながる景観域である事は、近世における数々の紀行文が証明するところではあるが、一つ一つの社寺はあくまで独立した点であり、その間を結ぶ道は、間を結ぶ事以外に特に意識された景観は持たなかったといえる。



図4 近世に存在した浄土寺・鹿ヶ谷の道と集落

### 3. 近代以降の空間変容に基づく時代区分

表1のように近代における浄土寺・鹿ヶ谷地域の開発に関わる事項をまとめると、主に2段階のインパクト（琵琶湖疏水建設と都市計画区域決定）を経て現在の景観に至った事が把握できる。これに基づいて時代区分をすると次のようになる。第1期近代：衰退した京都に、琵琶湖疏水が建設される明治23年（1890）までの復興期。第2期近代：平安遷都千百年紀年祭、三大事業を成功させ、都市計画法に基づく計画区域が指定される大正11年（1922）までの活性期。この時期の始めに京都帝国大学が設立される。第3期近代：都市計画区域の決定に基づき、爆発的に宅地開発が進む、都市の拡大期。この時期に琵琶湖疏水分線に沿って「哲学の道」原形が形成される。

### 4. 第1期近代 - 琵琶湖疏水分線の出現

東京遷都後の近代京都は、都市の中核を失い一時期衰退を極めた。その折に琵琶湖疏水の建設が持ち上がる。建設の目的としては、製造機械（水車利用）、運輸、田畑の灌漑、精米水車、防火、井泉、衛生が挙げられた。1883年（明治16）11月の起工伺計画案<sup>2)</sup>では、「...第2トンネル出口から南禅寺村を経て、大きく北に迂回し高野側へ達した後...」というように、浄土寺・鹿ヶ谷界隈を貫いて京都市街地を北へ迂回するルートが選択された。これは、水路勾配を緩くとり開門などを設置せず、すむ上に舟航の便がよい事や、洛北の灌漑用水を確保できることが理由であると勸業諮問会などで説明されている。その後計画ルートは数度変更され、結局明治23年（1890）の完成時には、水車運転及び灌漑用水を目的とした分線が図1の鹿ヶ谷ルートを通った<sup>3)</sup>。北方へ緩やかに下るこの水路は東山に沿わせて徐々に高度を下けているため、山裾の等高線をほぼ体現し、緩やかな曲線を描いている。

第1期近代の浄土寺・鹿ヶ谷地域の景観は、図5に見られるように、近世のほぼそのままの状態が続く、疏水分線開通後においても、田地に水路が通った程度の変化であった。

表1 近代以降の対象地域における景観関連事項

		京都一般	浄土寺・鹿ヶ谷
1871	明治4	鹿藩置県	
1872	明治5	京都博覧会	
1885	明治18	琵琶湖疏水起工	
1888	明治21		浄土寺村・鹿ヶ谷村、京都市上京区へ編入
1889	明治22	京都市制・町村制施行 琵琶湖疏水線上インクライン完成	第三高等中学校設立
1890	明治23	琵琶湖疏水の完成	
1895	明治28	平安遷都千百年紀年祭	
1897	明治30		京都帝国大学設立
1906	明治39		文科大学設立
1912	明治45	三大事業竣工祝賀式典	
1919	大正8	都市計画法	
1920	大正9	都市計画京都府委員会設立	
1921	大正10		閉雪校植樹
1922	大正11	市都市計画区域決定	
1924	大正13	都市計画区域における用途区域の指定	
1929	昭和4	東山・中京・左京の三区増設	
1945	昭和20	(戦後)	
1970	昭和45	大阪万博・観光ブーム	疏水通散策道工事
1972	昭和47		疏水通散策道工事



図5 琵琶湖疏水分線の竣工当時の鳥瞰イメージ（開通前の景観に筆者加筆）

## 5. 第2期近代 - 疏水ベリ散策路の黎明

明治23年(1890)の琵琶湖疏水竣工から都市計画法が施行されるまでの30年ほどの間は、浄土寺・鹿ヶ谷地域の景観は、未だ田畑が多くを占めるものであったことは、当時の都市計画図から把握できる。この山辺にできた新しい水辺の利をいち早く発見したのは日本画家の橋本関雪であった。大正5年(1916)より橋本関雪は、浄土寺の疏水ベリに住み、敷地内にアトリエと、琵琶湖疏水分線から水をひいた広大な遣り水庭園を造った<sup>4)</sup>。

この橋本関雪の妻、よねが、大正10年(1921)に疏水に沿って300本のソメイヨシノを京都市に寄付して植樹し<sup>5)</sup>「関雪桜」と知られる並木に成長した。橋本夫妻が生前、非常にこの桜並木を愛し、熱心に培ったことは有名である。彩りを添えられた「疏水ベリ」の風景は、この後の住人たちによって、その原風景として記憶されることとなる<sup>6)</sup>。

## 6. 第3期近代 - 宅地開発と「哲学の道」形成

### (1) 都市計画を契機とした宅地開発

浄土寺村・鹿ヶ谷村は、第1期近代の明治21年(1888)6月、琵琶湖疏水完成に伴う工場進出を見込んで京都市上京区へ編入<sup>7)</sup>されたが、その後第2期近代の約30年間は殆ど市街地化が進まなかった。この地域の本格的な市街地化は、大正11年(1922)の京都都市計画区域決定に続く大正13年(1924)の用途区域指定後に爆発的に進むことになる(図7)。この都市計画による用途地域は、商業地域・工業地域・住居地域の3部門であり、特に浄土寺・鹿ヶ谷地域については、住居地域に指定された。住居地域は、「土地概ネ高燥風物快適ニシテ、土地ノ現状亦主トシテ住居ノ用ニ供セラレ陵墓社寺名勝舊蹟モ亦多ク之ニ介在スル<sup>8)</sup>」地域として定められたものであり、計画には社寺の領域に接する所まで住居区を拡大する意図があった。

### (2) 宅地開発と並行する文人の働き

関雪桜が植樹されたのは、大正10年(1921)であるから、これらの具体的な都市計画がこの地域で実施されて住人たちの生活場としての意味を持つよ

うになる以前に、先駆的住人であった橋本関雪の手によって並木の景観が添えられたことは、この後の境界形成に大きな影響を与えたものと思われる。

「哲学の道」の名前の由来は、京都帝国大学において独自の学風の基礎を築いた<sup>9)</sup>とされる西田幾多郎を始めとする哲学者がここを散策した事に因むが、西田による散歩の記録を表2<sup>10)</sup>にまとめた。

注目すべきことに、大正元年までの記録では、琵琶湖疏水が全く意識されていないのに対して、昭和11年以降の散歩は「疏水散歩」「銀閣寺川邊散歩」などと水辺を歩くことが強く意識されている。つまり、第2期に散策されたのは、未だ近世までに成立した法然院、慈照寺などの山辺深い社寺を結ぶ道であり、関雪桜の並木ができた後の第3期近代になって初めて、その時代の風景として疏水ベリの散策路が発見されたといえる。

同様に、この時期からに西谷啓治、和辻哲郎、田中美知太郎など「疏水ベリ」に住まう文人が現れ始めた。また、ここを題材にした文学作品が多数発表されるようになる。



図7 大正11年(左)と昭和4年(右)の土地利用

表2 日記等に見る西田幾多郎の東山散策状況

日付	記述
明治43(1910).10.2	午後桑原君と東山の邊を散歩す。法然院、安楽寺、若王子、永観堂を見る。
明治43(1910).10.16	...此頃は毎日銀閣寺の邊を散歩す。此邊の景色は實によい... (東京宛書簡)
明治43(1910).10.16	午前法然院邊まで散歩す。
明治44(1911).2.10	午前銀閣寺邊を散歩し、...
明治44(1911).4.5	...午後やよひ、敏子つれて南禅寺より銀閣寺まで廻る。
明治44(1911).5.2	午後母を伴うて銀閣寺など見る。...
明治44(1911).9.7	...夜、此夜は芋名月といふので家内と東山の邊を散歩。
明治44(1911).11.3	午後法然院の近邊を散歩す。
明治45(1912).6.29	午後法然院まで散歩。
大正元(1912).9.28	...午後久しぶりにて東山の方を散歩す。
昭和11(1936).6.14	徳光、下村と銀閣寺の庭を見る。
昭和13(1938).1.7	疏水近邊散歩。...
昭和13(1938).1.18	疏水邊散歩。...
昭和14(1939).4.11	午後疏水散歩。...
昭和15(1940).4.15	銀閣寺川邊散歩、櫻満開。...

### (3) 疏水ベリの生活空間化

このような住居地域開発に先駆けた疏水ベリの啓発は、散策路としての場所性を開花させたが、同時

に周辺領域の開発もこれに歩調を合わせるように、疏水ペリを意識して行われた。図7の右の地図から分かるように、疏水ペリの開発には先行して行われた箇所がある。この部分は、水路が地形にそのまま収まっていた部分であり、そこが水路まわりに擁壁などが設けられた他の部分より先行されたのは、それだけ住居に馴染みやすかったと考えられる。

浄土寺・鹿ヶ谷地域は、住宅地が拡大する中で、寧ろその界線的な広がりや、山辺に潜む社寺の領域から、住宅地域の方へ拡張したといえる。住宅地の中に並木と水路の景観を培い、山辺と水辺が接近して存在する、賑わいと静寂の二層構造の貴重な景観域は、このようにして住宅地域に成立した(図8)。

## 7. 戦後 - 「哲学の道」整備工事

時代が下り、昭和44年(1969)から松ヶ崎浄水場への給水能力を増強するために「哲学の道」と分線水路の境目に口径1800mmの導水管を埋設する工事が行われた<sup>11)</sup>。それを機に、車交通が問題となっていた「哲学の道」を「昔のような散策道」にしたいという地元住民が『哲学の道保勝会』を立ち上げ陳情し<sup>12)</sup>、整備工事が実施され、昭和47年(1972)に竣工した<sup>13)</sup>。

図9<sup>14)</sup>の整備計画によると、導水管を埋設するために、水面幅で80cm程縮小し、水路左壁の法勾配を急にして、土手を水面に近づけた。水に対するアクセスを断つ形ではあるが、散策路として水をより近くに感じることでできる設計になったといえる。桜並木をそのままに、並木と水路の間に人の歩くことの出来るスペースを設けたものであった。

このように、山辺地形の中を緩やかに流れるような線形設計の琵琶湖疏水分線が第1期近代にでき、住人の善意で第2期末に桜並木が加わり、さらに戦後に散策路として意識的な整備が行われ、現在に至る「哲学の道」が成立した。

## 8. まとめ

名所の原形としての社寺景観については、山並みとの距離や位置、あるいは山並みの形状によって、庭園や建築の背景が特化し、その起源(別荘、道場、

社)によって特有の構成を持つが、これらは共通してこの地域の最も奥にあり、山へ向かっていた。

近代以降は、疏水設計当初の地形に沿った緩やかな曲線が基本的な風景の構成を形づくり、関雪桜の植樹によって特異性が培われ、昭和45年(1970)の散策路整備工事が最終的な形を作った。

「哲学の道界限」が文人により認識されていく過程は、京都市の都市計画による住宅地開発と同時期であった。その中で、山辺深くの社寺の雰囲気はそのままに、疏水ペリ散策路が全体を一つの景観域として強く結びつける2層の構造が形成された。

こうした一連の変遷を経て、近世のそれぞれが山へ向き地域の中の特性点として存在していた社寺の領域は、水辺の散策路により一つの界限の中に結びつき、全体として景勝地としてイメージされるものとなった事が明らかになった。

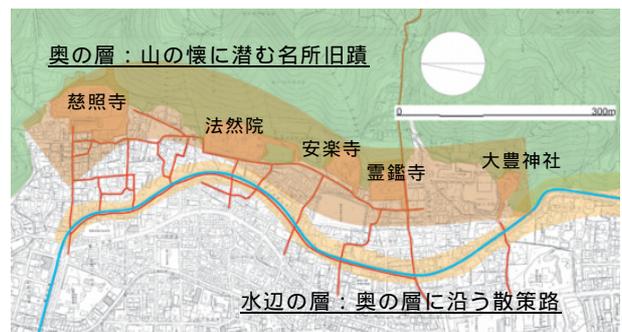


図8 哲学の道周辺における二層構造の界限

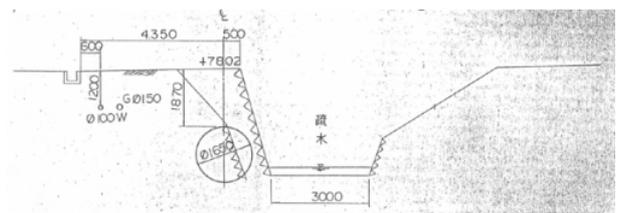


図9 琵琶湖疏水分線整備計画の断面図

- 1) 樋口忠彦：日本の景観、ちくま学芸文庫、p.86、1993.1
- 2) 京都市参事会：訂正琵琶湖疏水要旨(全)、pp.24-25、1896.7
- 3) 田邊朔朗：琵琶湖疏水誌、丸善株式会社、pp.79-89、1920.10
- 4) 橋本帰一、マイウェイ論々、p.49、白沙村荘、1979.10.18
- 5) 京都市水道局：琵琶湖疏水の100年<叙述編>、p.557、1990.4
- 6) [http://osaka.yomiuri.co.jp/new\\_feature/anohito/2002/020408m.htm](http://osaka.yomiuri.co.jp/new_feature/anohito/2002/020408m.htm)
- 7) 京都市水道局：琵琶湖疏水の100年<叙述編>、p.25、1990.4
- 8) 京都市土木局：京都都市計画小誌、p.56、1929.3
- 9) 京都市編：京都の歴史 第8巻、p.497、1980.1
- 10) 西田幾多郎：西田幾多郎全集第十七、十八巻、岩波書店
- 11) 京都市水道局：琵琶湖疏水の100年<叙述編>、p.558、京都市水道局、1990.4
- 12) 京都新聞、「哲学の道よみがえる」、昭和45年9月15日火曜日、1945.9
- 13) 京都新聞、「“哲学の道”永遠に」、昭和47年3月22日水曜日、1972.3
- 14) 京都市水道局上水部建設課：松ヶ崎浄水場拡張整備事業導水管布設工事(その3)断面図、竣工図第16-5号